

潮時



榊原千鶴

名古屋大学男女共同参画センター
[464-8601] 名古屋市千種区不老町1
教授, 博士(文学).
専門は日本文学.
chizuru@nagoya-u.jp

この原稿を書いている2017年9月、研究室の引っ越し準備に追われている。11月に開館する名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)の実質的な管理運営を担当するため、男女共同参画センターからGRLに引っ越すのである。日本の中世から近代を対象に、女性はなにを学んできたのか、文学作品や女訓書(日常の立ち居振る舞いやわきまえておくべき教養などを記した女性向け教訓書)を手がかりに女性教育史を研究している私の場合、荷造りの9割は書籍、史・資料である。感傷に浸っている時間などない!と思いがながらも、院生時代にやっとの思いで手に入れた書籍、輪読会や研究会の発表資料が出てくると、当時のことが自ずと思い出され、いまは亡き恩師の直筆を目にして思わず手が止まる。

南山大学で学部を過ごし、社会人となった当時の私にとって、大学院は遠い存在だった。卒業論文を書くなかで、もっと勉強したい、との思いは募ったが、それが社会に出ることへの恐れによるものなのか、自分でも判断が付きかねた。わからないならいったん社会に出てみるしかない。もし、進学の違いが本物なら、そのときは大学院を受験しようと考え、入学金と初年度の授業料を貯めることにした。そうした折り、私の卒業論文を学科の雑誌に掲載してはどうか、と先生方が提案くださった。自分の覚悟を試すとき。そこから、恩師による論文指導が始まった。提出した原稿は添削で真っ赤。何度突き返されたことだろう。その過程で、問題の勘所をつかむこと、新しい発見があること、資料を正確に読み、自分なりの解釈を示すこと、細部にとらわれすぎず展望をもつこと、接続詞や「てにをは」の使い方まで、研究の基礎を学んだ。雑誌が刊行されたとき、引用した研究者に論文の抜刷を送るよう恩師に言われ、謹呈したお一人(後の名古屋大学での指導教授)から、うちの大学院にいらっしゃい、と声をかけていただいた。けれどふんぎれず、いまは進学は考えていません、と答えた。

退路を断ち、大学院受験に臨んだのはそれから2年後、25歳のときだった。一步踏み出すまでに、私には

それだけの時間が必要だった。けれど後期課程に進学してみると、世の大学は学部改編真っ盛り、従来の文学部は、文化、国際、情報といった名称の学部に取り替わり、専門に合う公募は1年に一つ出るか出ないか。非常勤講師として看護学校、短期大学、四年制大学、予備校と授業をかけたもちするなかでの結婚、出産。予定日を告げないまま妊娠10カ月に入っても予備校の教壇に立ち、夏休み中に出産、9月に復帰した。休めば翌年のコマは減らされてしまう。無我夢中だった。課程博士の制度が始まっていたが、育児と非常勤の仕事に追われ、制度の中身を把握しきれない間に、わずかの差で申請年限を過ぎてしまった。このままでは就職で勝負にならない、と思ったとき、すでに退職されていた指導教授から、論文博士をめざせばよい、との助言をいただいた。研究書1冊程度の発表済み論文はすでに手元にあった。あとは夜なべでまとめるだけ。とはいえ30代での論文博士取得はほとんど例のないこと、ダメ元で学科の教授に相談すると、提出しなさいとのことば。救われた。幸い、博士論文の出版を勧めてくれる編集者に出会い、運良く書籍化、37歳にして名古屋大学文学部の助手(当時)に採用された。その後、思うところがあり、2010年に男女共同参画室(2017年7月より男女共同参画センター)に異動、女性教育を歴史的な観点から研究する一方、センターでは子育て支援、女子学生支援、介護支援などを担当している。闘病中の恩師に、異動の相談をしたあの日、研究は続けるんだよな? なら、思うようにやれ、大切なのは、人生を楽しむことだ、と言われた。それが、最後の会話となった。

そしてこのたび、男女共同参画センターの仕事の一環として、ライブラリの立ち上げ、管理運営にも携わることとなった。大学人としての最終コーナー、退職後の研究生活を思い描き始めつつあるいま、図書資料にかかわる巡り合わせ。寄り道、回り道も、機が熟するために必要な時間、ものごとには潮時があると思う。図書館長も務めた恩師の、研究も運営もきっちりやれ、という声が聞こえる。